
約束

坂田火魯志

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

約束

【コード】

N9029A

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

四つ年下の従妹にいきなり結婚してと告白された主人公。それからもことあるごとにそれを言われ遂には。従兄妹同士のお話です。

第一章

約束

「ねえ、お願いがあるんだけど」

その時俺は従妹の家に遊びに来ていた。そして当の従妹の里恵にこう言われた。

「何だよ、いきなり」

俺はそう言っただけで里恵をじろりと見た。俺はこの時こいつの家の廊下の柱にもたれかかって座っていた。ただ何となく外を見ていた。

俺はこの時十四だった。中学二年だ。里恵は十歳、小学四年だ。

俺の親父の妹の子供だった。俺の姓は松井といったがこいつのお袋さんは結婚して上林になっていた。顔はまあどこにでもある顔だ。

よくもなければ悪くもない。ただ黒い髪が綺麗だったし童顔で可愛らしくはあった。といっても十歳やそこから童顔も何もなかったが俺の方は別にいい話も悪い話もなかった。バレー部でそろそろレギュラーになるうかって話だったがこれは先輩達がそろそろ引退するからだった。成績はこのままだったらそれなりにいい高校に入られるといったところだった。特に変わったところはない、平凡な学生だった。

「よかつたらさ」

「ああ」

「ここでこいつはとんでもないことを言いやがった。」

「結婚してくれない？」

「馬鹿言っただけじゃねえ」

俺はすぐにこう返してやった。これは本心から言っただけだった。

「何で俺が御前と結婚しなきゃいけないんだよ」

「こんなガキと。本当に馬鹿なことを言っていると思った。」

「だって好きなんだもん」

「何で俺のことが好きなんだ？」

約束

俺は問うてやった。まずはそれを聞かないと納得がいけないからだ。

「格好いいから」

「俺がか」

「うん、それに小さい頃から優しくしてくれたじゃない」

「当然だろ」

本当に当然のことだと思う。親戚の女の子でしかも年下じゃ優しくするのが普通だろう。だがそれでいきなり結婚を切り出されるとは思わなかった。何があるかわかったものじゃないってのは本当にこのことだ。とにかくそれと俺のルックスが理由でこいつに今結婚を切り出されているのは紛れもない事実なのがわかる。それだけは今の状況でも何とかわかった。

「勿論すぐにじゃないよ」

「当たり前だ」

俺はまた言っただった。

「十歳で結婚なんて出来るわけねえだろうが」

「じゃあ後でならいい？」

「後でって？」

俺はわざと呆れた顔で応えてやった。

「うん、後で。今は駄目なんだよね」

「結婚は十六歳からだよ」

俺は慥然とした声で教えてやった。

「せめてそうした話は十六になってからしろ。いいな」

「うん。だったらそうする」

それでこの時は話は終わった。里恵はとりあえずはその場は大人しく引き下がった。赤いスカートがヒラヒラと動いていたのを覚えている。

「何考えてやがるんだ」

そう思ったがこの時はすぐに忘れた。一週間経ったらもう考えることもなくなつた。そのまま中学から高校、そして大学に入った。

何事もなく過ぎていった。

気がついたら成人式に行つて二十になっていた。ここでまたあいつが出て来た。

「ねえ」

里恵は高校に入つて暫く経つていた。秋に法事で集まつていた時に俺に声をかけてきた。

「ん！？何だよ」

一族の者が集まつての飲み食いした後で一息ついてた時だった。俺は一人部屋に戻つて残つた酒を飲みながら一息ついていた。俺は黒い葬式用を使う服を着ていた。里恵は学校の制服でブレザーだった。法事に出るには少しどうかと思う赤いブレザーに赤と青の派手な柄の丈の短いスカートだった。靴下は黒のハイソックスだ。髪はもう茶色に染めていて完全に今時の女子高生になっていた。そんな里恵を見て俺は何を思うわけでもなかった。

「あの」

「何だ？飲みたいのか？」

俺はこつそり酒でも飲みたいのかと思つた。まだ開けてないビール缶を一つ差し出した。

「よかつたらどうだ？」

「あたし飲まないから」

「そうなのか」

「じゃあ別のものかと思つた。」

「煙草か？」

俺は思つたことをそのまま口にした。

「悪いけどな、俺は煙草はやらねえんだ」

高校の頃ツレに勧められてやつてみたことはあるがあまりにも咳き込むので止めた。それ以来一度も吸つたことはない。正直あれの何処がいいのかわからない。だから俺は二十になつても酒だけだ。もつともこれは二十になる前から知つていて親に隠れてやつていたが。

「それも違うよ」

「じゃあ何なんだよ」

俺はこいつが何で来たのかわからなくなってきた。

「クスリとかシンナーだったら絶対に止めるよ」

「そんなのしてないから」

「そうだよな」

馬鹿なことを言ったと思った。こいつはそんなことをする程馬鹿じゃなかった。

「ジュースでも飲むか？」

見ればビールに混ぜって缶ジュースがあった。林檎のジュースだった。

「これでよけりゃ」

「もらっていい？」

「ああ」

俺はそのジュースをやることにした。里恵はクッションを持って来て俺と向かい合って座った。正座だった。

「で、どうしたんだ？」

俺は碎けた姿勢のまま飲み続けていた。そして尋ねた。

「何かやけに物々しいけれどよ」

「前の話、覚えてる？」

「話!？」

俺は酔った顔と頭を捻った。

「何時の話だ？」

いきなり言われてもわからねえ。そもそもこいつと話をしたのかどうかさえ覚えちゃいない。最近話した記憶がないので何年前の話かとも思った。

「私が十歳の時の話だけれど」

里恵は畏まって言った。

「覚えてるかしら」

「つっと六年前か」

中学生の時だ。その時の記憶なんて殆ど残っちゃいない。

「どんな話したんだっけ」

「結婚だけれど」

「結婚」

「私と陽一兄ちゃんが。結婚するって話」

「お、おい」

そういえばそんな話もしていた。あの時俺は何となくこいつの家の廊下でだべっててそんな話を言われた。その時は適当にあしらった記憶がある。そのことを急に思い出してきた。酔ってるってのに急に頭が回りだした。

「あの時の話かよ」

酔ってはいたがやけに冷静にその時のことが思い出されてきた。はつきりと頭の中に浮かんでいた。

「うん、あの時」

里恵は答えた。

「思い出してくれた？」

「あ、ああ」

俺はビールを一口飲んで落ち着いてから答えた。

「あの時かよ」

「それでね」

次に言うことはわかっていた。嫌になる程よくわかった。

「私、十六になったし」

「馬鹿言うんじゃないよ」

俺はあの時の態度のまま言葉を返した。ただ違うのは酒が入っていることだった。もうほとんど自分が何言ってるのかわかっていなかった。後で言われてやっと思い出した位だ。

「御前まだ高校生だろうが」

「高校生でも結婚出来るよ」

「法律じゃあな。けれどな」

俺は言っちゃった。

「普通高校で結婚してる奴なんかいねえだろうが」

「それでも」

「よく考えろ」

俺は缶を置いた。そして姿勢を正して言った。

「結婚してあれこれやって学校なんか行けるか。大学でも辛いんだぞ」

「そうなの」

「だからな、そんな話は後にしろ」

この時俺は諭したつもりだった。だがそれは結局話を先送りにしただけだった。だがその時それには気付いちゃいなかった。そもそも何で俺なのかさえわかっていなかった。

「いいな」

「高校卒業してからだったらしいのね」

「それで主婦になるなり働くんなりだったらな。まあ相手が働いてりや学校に行ってもいいな」

俺は自分が言われているのを完全に忘れてしまっていた。よく考えたらこれこそが酒のせいだった。酒の神様つてのは本当に意地悪なものだ。それに引っ掛かる俺も間抜けなんだが。

「相手次第ってことね」

「そういうことだ」

ここで俺はまたビールを手に取った。

「まあもう少し先だな」

「うん、わかったわ」

この時の話も話している側から忘れていっていた。何か里恵の奴がにこにこしているのが見える。

「じゃあ約束だよ」

「ん！？ああ」

もう何の約束だかわかつちやいなかった。

「高校卒業した時ね。また来るから」

「またな」

気が着いた時には俺は親父に声をかけられていた。

「おい」

「ん!？」

どうやら酔い潰れて寝ちまっていたらしい。目を開けると親父が苦い顔をしてそこにいた。少しうとうととしちまっていたらしい。酒臭い息を大きく吐き出した。

第二章

「親父かよ」

「ああ」

俺はお袋似だとよく言われる。親父にはあまり似ていない。似ているのは髪の色位だ。その他は本当に似ちやいない。岩石みたいな顔をしている親父だ。

「見ないと思ったらここにいたのか」

「法事は終わってるんだろう？」

「まあな。まあどれだけ飲んでもいいんだが」

「悪い、飲み過ぎた」

俺はそう言いながら起き上がった。

「何か里恵と話してただけだな。何の話だったかな」

「里恵ちゃんならまだうちにいるぞ」

「いるのかよ」

「やけに機嫌がいいがどうしたんだ？酒でもやったのか？」

「酒！？」

俺はまだ酔いが回ってどうしようもない頭で俺は考えた。

「一応勧めた記憶はあるけれどな」

「おい」

未成年に勧めたことを咎められた。

「幾ら何でも。しかも制服を着ている相手に」

「けれどあいつは飲まなかったぜ」

「そうなのか」

「確かな」

それはまだ覚えていた。

「林檎のジュースか何か飲んでたぜ」

「そうか、ならいいんだがな」

「で、あいつ機嫌が良かった？」

「うむ」

「何でなんだろうな」

「こつちこそそれを御前に聞きたいと思ったんだがな」

「俺にはわかりやしねえよ」

「本当に聞いたことを忘れちまっていた。」

「あいつのことなんて」

「そうか」

「まあ何か他にいいことがあったんだろ」

「そう思うだけだった。」

「特に気にすることないんじゃないかねえか？どうせ大したことじゃねえしよ」

「じゃあいい。悪かったな、起こして」

「いや、いいよ」

「酔い潰れてる方も問題があるのはわかっていた。」

「こつちも飲み過ぎちまってるし。それでな」

「ああ」

「とりあえず酔いは醒ますから。それから叔母さんにも挨拶するか

ら

「早くしろよ」

「とりあえずシャワーでも浴びてくる」

「ああ、それですっきりして来い」

「それで俺は頭から冷たいシャワーを浴びて頭をすっきりさせた。」

「ついでにさっきの理恵との話も綺麗に忘れた。その日はそのまま別れた。これで何も無い筈だった。」

「それから二年経った。俺も何とか就職と卒業が決まりほっとしていた時期だった。またあいつが家にやって来た。今度は一人だった。」

「そついや御前も卒業決まったんだよな」

「うん」

「里恵は明るい声で頷いた。その時は親父もお袋も家にいなくて俺一人だった。俺は里恵をリビングに案内してソファーに腰掛けて話

を聞いていた。この時はたまたま酒もなくサイダーを飲んでた。
「何とかね」

「何とかかって言ってるのよ」

俺はその言葉に口の端で苦笑いを浮かべて応えた。

「大学に受かったそうじゃねえか。それも推薦で」

「知ってたの？」

「お袋が電話でな。話してたのを聞いたのさ」

「そうだったの」

「それも結構いい大学じゃねえか。このままいったら将来は安泰だな」

「そうね」

里恵はにこにここと笑いながら頷いた。

「相手もいるし」

「相手!？」

「うん」

やっぱりにこにこしたまま答える。

「約束、覚えてるかな」

「何の約束だよ」

「つてとぼけちゃって」

「とぼけてる!？俺が!？」

「そうよ。ほら、私が十歳の時」

「十歳の時」

「それで高校入った時。覚えてるわよね」

「御前が十歳の時って」

言われながら頭の中で俺の歳と合わせて計算した。

「俺が中二の時だよな」

「それで二年前は」

「俺は二十歳だ」

「その時言っただじゃない」

「俺が!？」

「相手が働いている時に。結婚すればいいって」
「おい、待てよ」

何かやばい雰囲気だった。

「それって俺が御前と」

「そうだよ。結婚しない？」

「って従兄妹同士でか」

「従兄妹同士でも結婚出来るよ」

「俺と御前がそんなの言ってもな」

「うちのお父さんとお母さんはいいつて言ってたよ」

何時の間に。それを聞いて顎が外れそうになった。

「なっ」

「あとはお兄ちゃんの方だけだけどそっちはどうとでもなるよね」

俺の親父もお袋も早く結婚しろとは言うが相手はどうしようもない女じゃなきゃいいって考えだ。ましてやこいつは俺の親にも受けがいい。よくいいお嫁さんになるとまで褒めちぎってやがる。それで向こうの親が話をしたらどうなるか。もう言うまでもないことだった。

「何てこった」

「紙はまだ持って来てないけれど」

「それを言いに来たのか」

「私じゃ駄目かな」

里恵は身を乗り出して俺に尋ねてきた。

「ずっと。何年も待ってたんだし」

俺の目を見て言ってきたやがる。それは反則だと思った。目を見られて断ることが出来る奴はそうはいない。ましてや俺みたいにそれ程女を知らない奴にやったら。負けるに決まっている。

「お料理とかお洗濯も出来るし」

「断るなっということだよな」

せめてもの反抗だった。こう言ってやった。

「別にそんなのじゃないけど」

「俺に断る理由もねえしな」

「えっ!？」

それを聞いて思わず顔をあげた。その時の顔は多分一生忘れないだろう。

「それってつまり」

「俺なんかでもいいんだよな」

俺はこう問うてやった。

「俺でも。どうなんだよ」

「お酒……入ってないよね」

「サイダーを酒って呼ぶんなら入ってるぜ」

「それじゃあ」

「いいよ、それで」

俺は言った。

「俺の方だつてよ。そこまで想われてたらよ。悪い気もしねえし」

「いいんだよね」

「何度も言わねえぜ」

俺はまた繰り返した。

「俺の方こそ。宜しくな」

「うん」

その時里恵は本当に明るい笑顔になった。太陽みたいに明るいつつ言えば大袈裟だが本当に明るい笑顔だった。その笑顔が全てを決めちまった。

こうして俺は約束を果たした。そして結婚して今に至る。今じゃ里恵も大学を卒業して俺の側にいる。

「今日も早く帰ってよね」

「仕事次第だな」

朝家を出る時にこう答えた。

「けど、なるべく早く帰られるようにはするけれどよ」

「お願いね」

そう言う顔はあの時の顔と同じだった。あれから何年も経ってい

るのに子供の頃の表情がそのまま残っていた。

「待ってるから」

「ああ」

そして俺は仕事に向かった。今日もやってやる。あいつの為に。

「もう一つ約束があるんだけれど」

「今度は何だよ」

俺は向かおうとする足を止めて尋ねた。

「子供…….…….だけだよ」

「ああ、そのうちな」

俺はこう言葉を返した。

「こればかりはそうそう簡単には出て来たりしねえからな」

何時までも変わらない子供のままだった。けれどそんなこいつだから俺は結婚した。

約束を覚えていたのは里恵だった。けれどそれを守ったのは俺だ。守らされたと言ってもいいかも知れない。けれどそれでもよかった。少なくとも悪い気はしなかった。

約束 完

2006・5・1

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9029a/>

約束

2008年11月7日09時20分発行